

明治期東京の名所と観光案内書

高槻 幸枝

I はじめに

明治期の東京は、日本の首都として政治・経済の中心地であると同時に、観光地としての側面も持っており、そこでは様々な種類の観光案内書が発行されていた。それらの案内書においては、寺社や季節の花を楽しむ行楽地のような近世から存在する名所に加えて、洋風建築物など明治期に入ってから成立した新しい名所も多く紹介されている。本報告ではまず、明治期を通じての、これらの案内書の体裁や構成要素の変化を整理する。次に、年代ごとに合計4冊の案内書を選び、それぞれの特徴や、どのような場所が名所として取り上げられ、またどのように描かれていたのかということを観察する。

II 明治期東京の案内書

東京都立中央図書館東京室所蔵のものを中心に、国立国会図書館、江戸東京博物館の蔵書から明治期の東京の案内書177点をリストアップし、体裁や内容について整理をおこなった。そこから推測できる明治期の案内書の全体的な傾向を以下に示す。

なお、本報告では「案内書」を、東京を「案内・紹介する目的で刊行された出版物」と定義する。これは、現在の観光ガイドブック的なもの、商用で上京する人々のためのデータブックなども含む、広義の「案内書」と言える。

1. 出版年とタイトル数

第2回内国勸業博覧会が開催された明治14年(1881)、東海道線の全線(新橋―神戸)開通の翌年で、第3回内国勸業博覧会が上野公園で開催された明治23年(1890)、さらに東京勸業博覧会が開催された明治40年(1907)などに発行数の増加がみられた。

2. 装丁

明治10年代まではほとんどが和綴じ本である。20年代には和装本と洋装本が混在し、紙は二つ折りだが頁が打つてあるもの、目次は丁だが本文には頁の形式で数字が打つてあるものなど、丁と頁の扱いが混乱しているものもみられる。30年代には、ほとんどが頁を表示した洋装本になる。

3. 地図

表現形式に着目すると、鳥瞰図的なものか、現代の地形図のような平面的な地図かという、2種類に区分できる。ただし、「地図」が掲載されている29点のうち、鳥瞰図は、10年代に3点みられるのみであった。

また地図の方向をみると、西向き、北西向き、北向きに

分けることができる。西を上とするものは、伝統的な江戸図に倣っていると考えられ、西の端に富士山と思しき円錐形の山が描かれているものもある。10年代の鳥瞰図は全て西向きであった。

明治5年の太政官布告において、皇国地誌編纂のための情報提供にあたり、使用する地図は北向きにするように指示がなされており、実際に官製の地形図は北を上として作成されている。しかし、案内書の地図に関しては、明治末期に至っても、西向きのもものが散見され、江戸時代からの空間把握の様式が受け継がれていることが分かる。

4. 挿絵・写真

明治初期には江戸時代同様の木版が用いられているが、10年代から銅板や石版が変わっている。写真は30年代から使用され始め、40年代にはほとんどの案内書が写真を使用している。また、風景の写真集も、40年代に多く出版されている。

5. 表題

江戸時代の案内書類に似た表題が散見される。例えば「図会」または「図絵」という名称が表題に含まれるものが、10年代に2点、20年代に3点、40年代に1点みられる。また、「独案内」が含まれるものが20年代に1点、「繁昌記」が含まれるものが、明治7、9年(1874、1876)に1点ずつ、10年代に3点、20年代に2点、30年代に1点確認できる。

6. 編著者

明治20年代までは個人名がほとんどであるが、30年代から団体名によるものが出始める。特に39、40年(1906、1907)には、新聞社による案内書が目につく。

7. 価格

奥付に価格が明記してある39点のうち、1円を超えるものが4点あり(うち3点は30年代後半から40年代の発行)、その他は15銭から95銭まで様々である。

また40年代には、既存の雑誌の臨時増刊号として発行されたものや、年4回発行など定期的な刊行を予定していたものもみられる。定価は10～20銭代であり、単行本として発行された案内書よりも安く設定されていたようである。さらに、何冊かまとめて購入することで価格が割引されるという仕組みが採られており、購読を誘う工夫がなされていたことが分かる。

8. 対象読者

おおまかに、「地方在住者」、「地方在住者と東京在住者の両者」、そして居住地には言及されない「旅客」・「旅行者」・「遊覧者」などに分けることができる。地方在住者だけでなく、東京在住者も合わせて対象とする理由としては、東京は広いため居住していても全てを把握するのは

困難であること、新しい名所が次々に出現していることなどが挙げられている。なお、『東京案内』（明治40年、1907）¹⁾には、地方から上京した親類を、東京在住の「僕」が案内するという物語仕立ての文章が掲載されている。案内書は、このような場合に案内役となる、東京在住者の参考書としても、利用されていたと思われる。

Ⅲ 案内書にみる名所

以下では、明治10年代から40年代まで10年ごとに、それぞれの時期に発行された案内書について、その内容を見てゆく。とりあげる案内書の概要は、次に示すとおりである。

1. 明治10年代 『東京名勝図会』（明治10年・1877発行）

例言によれば、発行の目的は、新たに登場した名所の紹介および古くからの名所の再確認であり、想定されている読者は非東京在住者であったらしい。

冒頭で、東京の概要や繁盛の様子が簡単に説明されており、次に「第一大区之部」から「第十一大区之部」²⁾までの名所が区ごとに紹介されている。「第一大区之部」の最初に取り上げられている名所は、日本橋である。

地図（「東京区内名勝縮図」）は、西向きの鳥瞰図であり、画面奥には富士山がある。北は雑司ヶ谷、東は堀切村、南は洲崎、西は目黒あたりまでが描かれており、主要な名所がその名称とともに書き込まれている。

本文には、冒頭の「東京略説」を除いて、82件³⁾の名所が取り上げられている。また、挿絵は38点掲載されている。

最も多かった名所は神社・仏閣の51件であり、その紹介文では故事来歴、現在の繁昌の様子、境内にある四季の花などの自然物、また景色や眺望の良さについての言及が目につく。これらの多くは、江戸期以来の名所であるが、明治2年に創建された九段招魂社（第三大区之部の最初に置かれている）など、3件の神社は明治に入ってから成立した名所となっている。神社以外の新しい名所としては、官庁、学校、銀行、商店といった洋風建築物が7件ほど取り上げられている。石造橋や鉄道駅なども挿絵入りで掲載され、それらの紹介文では、建造物の外見の描写に加え、石橋築造や蒸気機関等の新しい技術や、郵便や公園等の新しい制度についても説明がなされている。

明治期の主要な名所の一つである皇城は、第一大区之部（全21件）の18番目に置かれている。本文は、江戸城が太田道灌により築城されたことから始まりその歴史が説明される。さらに当時は「官員かつ華族」にのみ拝観が許されていた吹上御庭の美しさが、拝観した知人から聞いた話として、細かに描写され、想像図とともに紹介されている。

また、木造橋から石造橋に架け替えられたもの、新しく架けられたものを合わせて10件の橋梁が名所として取り上げられている。その多くは、橋自体というよりも、橋を中心とした周辺の賑わいについて述べられているが、橋そのものが見物の対象とされているものもみられた。

2. 明治20年代 『東京名所図絵』（明治23年・1890発行）

序言、例言などは無く、発行目的や想定されていた読者層は不明である。

地図（「東京名所略図」）は、西南西を上とした平面図で、北は飛鳥山、東は梅屋敷、南は台場、西は目黒不動辺りまでをカバーしている。

名所件数は155件であり、挿絵は49件掲載されている。目次は無く、章立てもされていないが、これらの名所は、ほぼ当時の区（麹町、神田、日本橋、京橋、芝、麻布、赤坂、四谷、牛込、小石川、本郷、下谷、浅草、本所、深川の15区）ごとにまとめて紹介されている。

最も多く取り上げられている名所は、神社・仏閣の56件である（明治に入ってから創建された靖国神社を含む）。新しい名所としては、前項と同様、官庁や会社、学校といった洋風建築物が紹介され、「宏壮なり」（第一国立銀行）、「広大なり」（東京大学医学部）、「頗る美麗」（新橋停車場）などと形容されている。また、煉瓦街の舗装について、清潔で雨天でも泥で汚れることがないとしている。その他には、電灯会社、瓦斯機、停車場などが取り上げられている。

皇城の紹介は、冒頭の、東京の概略を記した文章の後に置かれ、その外観について「頗る美麗を極めたり」と表現されている。また、二重橋、正殿、宮殿、豊明殿、吹上御庭などの名前があげられ、それぞれについて簡単な説明が加えられている。

その他には、陸軍士官学校や砲兵本廠など軍関係の施設も目につく。また、前節の案内書同様、10件の橋梁が名所として取り上げられている。鉄橋として改架された吾妻橋の項では、周囲の賑わいなどへの言及は全くなく、銀行などの建物と同様にその外観に価値が見出され、見物の対象となっていたことが分かる。

3. 明治30年代 『東京横浜一週間案内 全』（明治34年・1901発行）

冒頭の「本書創刊に就いて」によれば、西洋の案内書を参考に一週間の見物コースを紹介していること、見物の道順から買い物の際の注意まで、きめ細かい案内がなされていることが本書の特徴であるという。また読者について「旅行家」という言葉が使われており、東京在住者よりも、地方から東京へ旅行してくる人々が念頭におかれていたよう

である。

地図（「東京新図」）は、西向きの平面図であり、北は飛鳥山、東は梅屋敷、南は台場、西は目黒不動の辺りまでが対象範囲となっている。なおこの地図の右下には、東京府を中心に埼玉県、茨城県、神奈川県、千葉県の一部までを含めた広域図（北向きの平面図）も載せられている。

名所の案内は、7日間、5日間あるいは3日間の見物コースを提示するという形式になっている。例えば7日間コースは、1日目に浅草向島を見物し、2日目に上野本郷、3日目に九段宮城日比谷、4日目に芝公園高輪、5日目に本所深川亀井戸、6日目は随意遊覧、7日目は観劇案内というものである。3日間で見物する場合には、7日間コースの2日目、3日目、4日目を、5日間の場合は、3日間コースに加えて観劇2日または観劇1日と5日目の見物場所を回ることが提案されている。浅草向島が省かれる理由には特に言及されていないが、凌雲閣やパノラマなど目新しい見物対象を擁している浅草はともかく、向島には三囲神社、長命寺、木母寺など、江戸期からの名所が多いため目新しさが少なく、優先度が低いと評価されたのではないかと考えられる。

以上のコースは、鉄道馬車や蒸気船を利用して東京の市街を移動するものであるが、その他に人力車による「急行三日」コースや、1日かけて郊外の名所を2～3ヶ所見物してくる「一日の市外見物」という項目もある。

案内の起点については、日本橋は「東京の中心といふべき土地」、上野附近は「地方見物人の主に定宿をとるところ」であることから「上野及び日本橋を起点とする」と「緒言」に書かれている。さらに、1日目の見物は浅草向島から始まっており（3日コースおよび5日コースでは上野本郷）、同時期の案内書の多くが皇城を冒頭に配置している中において、本書は少数派である。

名所は、第1日目から第6日目までの合計で、約130件とりあげられており、20点ほどの写真が添えられている。古くからの名所としては、明治10年代および20年代の案内書と同様、寺社や橋梁が目立つ。また明治初期から見物対象とされてきた官庁や銀行・会社などの洋風建築物については、「宏大」「華美」などと形容されており、明治30年代においても、その外観は見物のため足を運ぶに値するものと考えられていたようである。

宮城は前述のとおり3日目に紹介されている。歴史などについての記述はないが、「二重橋」の項目に、「（略）げに東京に來りしほどのものは、必ず必ずこの宮城を拝し奉ることを忘るべからざるなり」とされており、東京見物の際には欠かすことのできない立ち寄り場所と捉えられていたことが読み取れる。

また、王子の製紙工場について、煙突が並ぶ様が文明的

な景色として紹介されており、工場が見物の対象として捉えられていたことが分かる。

その他の新しい名所としては、音楽学校や東京大学などの学校、西郷隆盛銅像や楠正成騎馬銅像などの銅像、水族館や博物館などの文化施設、勸工場、さらに凌雲閣やパノラマ、見世物、新吉原遊郭（「見物」の対象として取り上げられている）などが紹介されている。また、見物途中で食事をとるための飲食店や土産ものを買う商店の案内、さらに旅館・商店・会社の一覧表や人力車賃金表なども掲載されており、実用的な性格を見て取ることができる。また、掲載の目的は不明であるが、病院案内、学校案内といった項目も備え、そこには診察料・入院料や位置情報等が細かく記述されている。

4. 明治40年代 『東京遊覧案内』（明治40年・1907発行）

例言には、博覧会開催を機に地方在住者を対象として、東京市内と近郊の案内を目的に作成されたとある。地方から東京への交通機関、宿泊、東京市内の交通機関、区ごとの名所、博覧会などについて紹介したもので、最終章の「如何に東京を去るべき乎」では、どこでどのような土産が買えるか、増えた荷物を郵便小包で送る方法などについてまで、懇切丁寧な案内がなされている。

このように実用的な面に配慮がみられる一方、掲載されている地図は、「大日本交通略図」（縮尺：千五百万分の一）という「千島諸島」と「琉球及台湾」を含む日本地図（北向き・平面図）のみで、東京市内の詳しい地図は掲載されていない⁴⁾。写真は47点載せられており、口絵には二重橋が使用されている。

取り上げられている名所は351件で、その他に本書発行の年（明治40年）に上野公園を会場として開催された、東京勸業博覧会の案内が加えられている。

紹介されている名所は、その過半数が会社・銀行や官庁など、明治期に入ってから成立した新しい名所である。

宮城は、区毎の案内の最初に置かれている、「如何に麹町区を観るべきか」の1番目の名所となっている。案内の文章では、官庁等と同様に、その位置と、江戸城築城から明治に入って宮城となるまでの簡単な歴史が紹介されているが、事実が述べられるのみで、建築物の外観や雰囲気についての言及はない。

また、浅野セメント合資会社、鐘ヶ淵紡績株式会社、王子製紙株式会社、東京製絨株式会社、千住製絨株式会社などの工場が紹介されている。これらの案内文も他の名所と同様であり、位置情報や客観的な事実が簡単に紹介されるのみで、見物対象としての魅力は積極的に語られてはいない。

古くからの名所としては、神社・仏閣が紹介されており、歴史、祭日および市の日取りなどについての記述がみられる。

IV まとめ

本報告においては、まず明治期に発行された「案内書」の全体的な傾向についての紹介をおこなった。次に明治10年代から40年代までの各年代について1冊ずつ、合計4冊の案内書を取り上げて、それぞれの案内書およびその中で案内されている名所の特徴を概観した。

明治期の名所には、江戸時代から名所として人々に受け入れられてきたものと、明治に入って新たに成立したものとがある。新名所の主なものとして、官衙、銀行、会社、橋梁、工場などを挙げることができる。明治の初頭に、洋風建築物として登場した官衙、銀行、会社などは、まずその外観に人々の注目が集まったと考えられる。官庁や会社など、現代の感覚からすれば見物の対象としては似つかわしくない新名所は、外観が人目をひくものであったことに加え、その中身に近代的なシステムが導入されていたという点でも、近代化を象徴する名所として捉えられ、案内書に取り上げられていたと考えられる⁵⁾。

工場は、本報告で紹介した案内書では、30年代と40年代のものに掲載されていた。工場の多くは当時の郊外（現在の北区や隅田川の左岸など）に立地している。『東京横浜

一週間案内』（明治34年、1901）には、煙突が並ぶ景色が、産業発展の象徴として紹介されている。

その他に、明治期の名所として重要な位置を占めていると考えられるのが、宮城である。宮城は、本報告で紹介した案内書を含む、明治期に出版されたほとんどの案内書で取り上げられている。案内書自体の記述を宮城から始めているものや、口絵に二重橋の絵や写真を配したもの⁶⁾も多く、東京見物の際には必ず立ち寄るべき場所と考えられていたようである。

これに対し、近世の案内書において重要な名所であった日本橋は、明治10年（1877）の『東京名勝図会』では冒頭に置かれているものの、その後に発行された明治23年（1890）の『東京名所図絵』や明治40年（1907）の『東京遊覧案内』では、宮城よりも後に配置されるようになる。繁華な名所であるという認識は、明治期を通じて概ね維持されているが、新しい名所が登場し、また鉄道の開通により街道の起点としての重要性が弱まるなかで、名所と認識される理由にも変化がみられる。

このように案内書には名所に対する人々の意識の変化が表れており、そこからは余暇活動における、前近代と近代の価値観のせめぎあい的一端を見てとることができるであろう。

表 対象とした案内書概要

タイトル	出版年 (西暦)	編著者	版元	装丁	サイズ (縦・cm)	頁数 (頁)	挿絵	写真	価格 (銭)
東京名勝図会	10 (1877)	岡部啓五郎著 大沢南谷図画	丸屋 善七	和	22.6	—	○	×	15
東京名所図絵	23 (1890)	木田吉太郎	東雲堂	洋	18.5	—	○	×	—
鉄道沿線名所旧 跡漫遊案内 東京横浜一週間 案内	34 (1901)	史伝編纂所編	史伝 編纂所	洋	18.6	211	○	○	—
東京遊覧案内	40 (1907)	東京市編	博文館	洋	14.9	312	×	○	—

—：表示がないもの

×：掲載されていないもの

注

- 1) 報知新聞社（1907）：東京案内，郁文館，176.
- 2) 明治7年の大区小区制の改訂により、この時期の東京府は、11大区103小区に区分されていた。
- 3) 名所の件数は、基本的には目次の項目としてあげられている名所数を数えた数字である。以下で取り上げる案内書についても同様の方法をとったが、目次の項目に名称が使用されていない場合には、単に名称が掲載されているだけでなく文章により紹介がなされているなど、主要な名所として扱われていると考えられるものをカウントした。
- 4) 『東京遊覧案内』と同時期に、同じく東京市により発行された『東京案内（上）（下）』（全1591ページ）には、「東京市十五区地図」が添付されている。
- 5) 銀行や会社の情報は、商用で上京した人々の実用に供されていた可能性もある。
- 6) 例えば、『東京名所図会』（明治23年、1890）、『東京横浜一週間案内』（明治34年、1901）、『東京遊覧案内』（明治40年、1907）などでは口絵に二重橋が使用されている。ちなみに『東京名勝図会』（明治9年）の最初に掲載されている挿絵は、「日本橋」である。